

連携室だより

鹿児島医セン

鹿児島医療センター（循環器・脳卒中・がん専門施設）

2016.9

vol. 125

看護の日 ふれあい看護体験 2016

担当者：大迫副看護師長、椋木看護師長
神野看護師長、佐々木副看護部長

「看護の心をみんなの心に」をテーマに、8月9日(火)に”ふれあい看護体験2016”を開催いたしました。この催しは、当院で実際に看護の体験をしていただき、「いのちの大切さ、思いやり、支え合い」を伝え、「看護」への理解を深めることを目的として毎年行っております。今回は5名の高校生の参加を頂きました。

当日は、まず病院見学を行いました。みんな緊張した面持ちでしたが、薬剤部や放射線科など他部門の方に温かく迎えられ、丁寧な説明を聞くうちに表情も幾分か和らいできたように感じました。その後、病棟で見学や体験を行いました。病棟では、清潔ケアや患者様とのコミュニケーション、車椅子の体験など、患者様との触れ合いを通して、看護することの喜びや難しさを感じることができていたと思います。また、先輩看護師に看護の魅力や看護師になるきっかけなど語ってもらうときには、真剣に聞き入っていました。

今日の体験を通して、全員が更に看護師になりたいという思いを強くしたように感じました。この思いを忘れずに、将来の夢に向かって頑張ってください、いつか一緒に働ける日が来るように願っております。

ふれあい看護体験の学生の感想

本日は、ふれあい看護体験に参加させて頂きありがとうございました。病院の見学からさせて頂いて、薬を作るところやレントゲン室などなかなか見る機会のない部署まで見学出来て、病院全体で医療提供しているのだと身近で感じる事ができました。私が配属された病棟の看護師さんはとても優しく、質問に答えてくださったり、教えて下さいました。患者様と話をした際に、患者様から「看護師さんは、いろいろなタイプの患者さんがいるけど、誰に対しても家族だと思って接したら、丁寧にするでしょう。」と言われ、どんな人に対しても、その家族に対しても、寄り添えるような看護師になりたいと思います。本当にありがとうございました。

(鹿児島南高校 萩原 伶南)



心房細動の最新のカテーテル治療法 —南九州初、当院でのホットバルーンによる肺静脈隔離術—

頻拍性不整脈に対するカテーテルアブレーションは1980年代に開始され、不整脈治療に大きく貢献してきました。

頻拍症はある一定の電気回路を巡回するか、あるいは、ある一点から異常な興奮が出ているかがほとんどであり、カテーテルアブレーションはその電気回路の一部を離断するか、異常な興奮が持続的に出現しているところを探して、その部位を焼灼することで頻拍を停止させる治療法です。開胸して直接心臓にメスをいれるわけではなく、足の付け根や肩から静脈を経由して心臓まで電極を挿入し、治療する方法です。胸を切開して直接心臓にメスを入れるわけではないため、翌日から歩行ができ、約4-6日の入院で、退院後は日常生活にそのまま戻れるため、開胸手術に比べ、体への負担も少ない治療法です。

一方、心房細動は頻拍の興奮が一定の回路を巡回せず、ある一点から持続的に興奮もしていないため、カテーテルアブレーションは不可能ではないかと考えられていました。

しかし、心房細動の起こるきっかけとなる興奮(上室期外収縮)の多くが肺から心臓(左心房)につながる、肺静脈の中から起こっている事が判明し、一気に心房細動に対するカテーテルアブレーション法が発展してきました。

現在では、肺静脈の入り口を囲むように熱で焼灼し、上室期外収縮が肺静脈からもれなくする肺静脈隔離術が主流となっています。焼灼による肺静脈狭窄の予防や、成績の向上のため、より外側で広範囲に肺静脈隔離が行われるようになりました。

従来の高周波カテーテルでの一回の焼灼で焼灼できる範囲は3-5mm前後で、一周約10-20cmを1ポイントずつ焼灼していくため隔離には時間がかかり、その習熟には多くの経験が必要でした。そのため短時間で容易に隔離を行えるように一気に肺静脈口を焼灼するバルーンテクニックの開発が待ち望まれていました。肺静脈の入り口にバルーンを押し付け、冷凍もしくは加熱する方法です。冷凍バルーンがすでに臨床応用されていますが、今回新たに日本で開発された、加熱する方法で肺静脈を隔離する、ホットバルーンが2016年4月から認証され使用できるようになりました。

開発者の一人である東京ハートセンター 曽原寛先生の指導のもと第1例目を先日8月1日施行いたしました。曽原寛先生は新杏病院(現新杏クリニック)で勤務していたこともあり、旧第二内科循環器グループとも縁が深く、細かいテクニックまで教えていただき、スムーズにアブレーションは終了いたしました。九州では福岡の3施設につづき4番目の施設となりました。手術時間は手術室から退室まで約3時間で、従来の方法より約2/3の時間で短く終

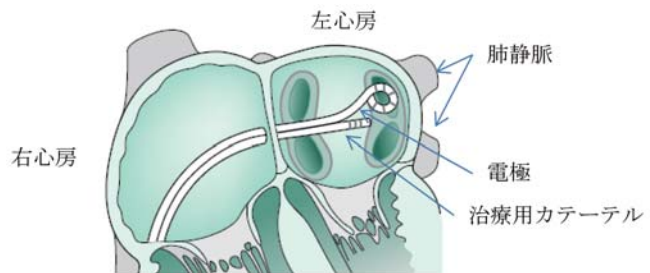
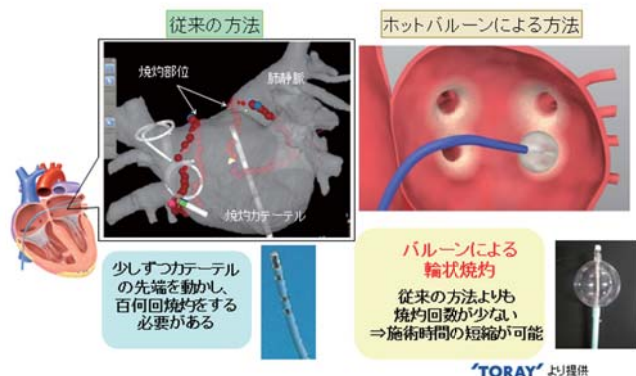


図) 通常的心房細動カテーテルアブレーション



了いたしました。手技に慣れて来ればさらに短くなることが期待されます。

バルーンテクニックによるメリットは、手技時間が短く、従来の方法に比べ術者間による手技の差が少なくなることがあげられます。デメリットは、やや放射線透視時間が長くなり、肺静脈以外の上室期外収縮に対応できず、適応が発作性心房細動に限られている点です。肺静脈以外の期外収縮については従来の方法を追加する必要があります。しかし、ホットバルーンでの治療成績は従来の方法と比べ遜色なく、合併症も同等であることが発表されています。

発作性心房細動のカテーテルアブレーションは、まず肺静脈隔離を行うことが基本ですので、肺静脈隔離がより短時間で確実に行われるようになれば、さらに治療成績は上がり、より多くの患者さんが対象となり、受けるメリットは大きくなるものと期待されます。

(文責：第二循環器科 塗木 徳人)

平成28年度 がん看護エキスパートナース研修

鹿児島医療センターでは、地域がん診療連携拠点病院として、がん看護における専門的知識と技術を習得することを目的に、7月25日(月)から29日(金)までの5日間の日程で平成28年度 がん看護エキスパートナース研修を開催しました。各施設においてがん看護実践の中核的役割を担っている院外6施設7名、院内4名の計11名が参加しました。

研修内容は、がんの成り立ちと診断・治療、がん医療における治療と看護、看護倫理の基本的知識、がん患者・家族の苦痛のアセスメントと看護介入、療養場所の選択と地域連携、がん看護におけるコミュニケーションについて、講義、ロールプレイ、グループワークを通して知識と技術を学ぶ系統立てたものとなりました。講師は当院の医師やがん分野の認定看護師(緩和ケア、がん性疼痛、がん化学療法、がん放射線療法)が中心となって担当しました。また、鹿児島大学医学部保健学科教授 堤由美子先生より「がん患者の心の軌跡に寄り添うケアを求めて」というテーマで特別講演をして頂きました。

この研修で、がん患者・家族の心の揺れを知り必要な援助を検討し、全人的苦痛をアセスメントし個別的な看護介入について考えることができました。ロールプレイで学んだ傾聴と共感のコミュニケーションスキルは、がん告知や治療選択などにおける心理的支援場面での実践につながっていくと思います。研修生からは「日々の臨床場面で困っていることを解決する方法を学び、今後の実践で活かせる内容であった。」「グループワークでは、他の人の意見を聞くことができ多くの気づきがあった。」などの意見をいただきました。

参加された研修生は、今回の研修で学んだ専門的な知識を看護実践の場面で活かし、今後、がん看護エキスパートナースとしてご活躍されることと思います。この研修でつながった研修生のネットワークが、がん看護における地域連携の一助となることを期待し、地域がん診療連携拠点病院として、さらに充実した研修を企画していきたいと考えます。

(文責：西4階病棟師長 養田 尚美)



平成28年度 新人職員宿泊研修

6月24日（金）8時25分病院玄関前より、研修生を乗せたバス一行は、いちき串木野市の吹上浜荘に向けて出発しました。例年蘭牟田池で行っていたこの研修ですが、今年は場所を変えての開催となりました。梅雨まっただ中のこの時期ですが、天気はなんとか持ちそうな感じで9時25分に到着しました。着いてすぐにこの宿のベストポジションといえる場所で写真撮影を行いました。その後研修会場に移動し、10時から12時まで「新人同士が集まり、日頃感じていることを語ろう」をテーマにグループワークを行いました。11班（1班5人程度）に分けてのグループワークでしたが、みんなでいろんな意見を出し合い和やかに話し合っている感じでした。12時からの昼食は、4階の海見えるレストランで東シナ海の新鮮な海の幸をいただきました。13時30分からは元KTSアナウンサー中村朋美先生より「社会人として必要な対応力とコミュニケーション力」というテーマで2時間講演をしていただきました。先生の言葉の中で「笑みスパイス」（人と接する際に微笑みを加えること）「エンジェルアイ」（何事にも天使のような目であること）という言葉が印象に残りました。講演の後には、レクリエーション「目隠しマスゲーム」「ジェスチャー伝言ゲーム」で交流を深めました。その後自由時間を挟み、19時から懇親会となりました。おいしい食事と研修生の息のあった余興を楽しませていただきました。中には完成度の高いものもあり、大変驚かされました。



2日目は8時30分から城ヶ崎臨床研究部長に「ゆくかわのながれはたえずして～起承転結～」をテーマに講演をしていただきました。講演の後、8時50分から10時20分までは「今、自分達にできること～鹿児島医療センターの職員として」をテーマに2日目から合流した者も加えて、病院の理念・運営方針を踏まえ、新人職員の自分達にできることについて考えながらグループワークを行い、各グループで意見をまとめた後、発表を行いました。各グループそれぞれに特色のある発表ができていました。事務部長、看護部長の講評の後には、花田院長に「医療者として目指してきたもの」をテーマに講演をしていただきました。先生の学生時代からのとても興味深い話が聞けました。

最後に全員で記念撮影を行って研修終了となり、帰路につきました。

今回の研修は、研修生71名と幹部及び他職員19名の総勢90名が参加しました。

参加人数としては過去最高の参加人数となりましたが、研修生の協力意識のおかげで時間どおりにスケジュールを終えることができました。みなさんととても良い時間を過ごせたのではないかと思います。

（文責：庶務係長 上脇田 勝教）



■お問い合わせ先

独立行政法人
国立病院機構

鹿児島医療センター（循環器・脳卒中・がん専門施設）

〒892-0853 鹿児島市城山町8番1号

代TEL 099(223)1151 FAX 099(226)9246 <http://www.kagomc.jp>

【地域連携】 蘭田・谷口・田上・吉永・椎原・吉留・菊永・久保・櫻木・田辺・宮崎

【がん相談】 松崎・森・水元・木ノ脇・原田・上妻

フリーダイヤルFAX専用▶0120(334)476

※休日・時間外は当直者で対応します。

